## 確認問題

**◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

小学校二年生だった「私」は、近所のパン屋さんで初めて「メロンパン」を見て母にねだったが、買ってもらえなかった。

緑色がかったさわやかなレモン色……。

もこもことした質感……。

メロンパンのすべてが私を①とりこにした。

目の前にあるのに食べられないと思うと一層おいしそうに思え、私はなやましく身をよじりながら、味を妄想した。

（きっと、こんな味で……、こんな歯ざわりで……、こんなにおいで……）

まだその味を知らないのに私はメロンパンのおいしさを疑わなかった。

②町で見かけた美しい女の子に恋をした少年が、まだ一言の言葉すら交わしたことがないのに、

「僕にはわかる。彼女はやさしくて、ナイーブなんだ」

と、思いこむのに似ていた。

私はメロンパンの味を思いえがくのに、想像力のすべてを注いだ。目で食うがごとく、じーっと見つめていると、実際は食べていないのに、本当に口の中が甘くなるのだった。同時に、鼻先を香料の甘いにおいがふぁーっとかすめたような気がして、小鼻が羽ばたいた。幻覚である。じわっと唾液もわいた。

母に手をひかれてパン屋から出、通りをわたってからも、私は後ろ髪引かれてふり返った。ウィンドウの「ベーカリー」という金文字の向こうで、レモン色がほほえんでいるように見えた。

人が「ああ、あれ食べたい」となやましく思うのは、前にそれを食べた味の記憶があるからだが、記憶もないのにこれほどくるおしく妄想をかき立てる食べ物は、後にも先にもメロンパンだけだった。

それから一年ほど経った頃だろうか。おこづかいをもらうようになった。確か、一カ月分が百円。

花模様のガマ口に、人生で初めての自由に使えるおカネを入れてにぎりしめ、私は一人でメロンパンを買いに行った。坂道を商店街へとかけ下りる自分の足が、地面から五センチくらいうき上がっている気がした。

その日買ったメロンパンを、どこでだれと食べたのか、不思議なことに覚えていない……。

覚えているのは、白い紙袋からメロンパンを取り出しながら手がふるえたことと、思いきりかぶりついた瞬間、ふわんとただよった香料のめくるめくにおい。

そして、あのカリフラワー状のもこもこが、パラパラと土壁のようにこぼれ始めたと思ったら、何かが突然、がばっと、「カツラ」のようにはがれ落ちた時の、えっ!?という、衝撃である。

レモン色のもこもこがはがれ落ちると、下から現れたのは、白いパンであった。味も素っ気もない、ただのパン……。

あれほど私を夢中にさせ、なやませたきれいな色のもこもこは、パンの表面をおおった、厚さわずか一、二ミリの「かさぶた」のようなものだったのだ。中身も、外側と同じでいてほしかったのに。

（　　）



③幻滅というものを味わった……。

（森下典子「いとしいたべもの」より）

★(1)　この文章で、話題の中心になっているものは何か。

［　　］

★(2)　この文章を内容のうえから二つに分けるとすると、後半はどこからか。後半の初めの五字を書き抜きなさい。

(3)　――線①「とりこにした」と同じ様子を表した別の表現を、文章中から十一字で書き抜きなさい。

(4)　――線②「町で見かけた美しい女の子に恋をした少年が、……と、思いこむのに似ていた」の部分は、どのようなことをたとえているか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

メロンパンを実際に食べたことがないのに、［　　］こと。

★(5)　［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　そうだったのか　　イ　そうだったよね

ウ　そうだったけど　　エ　そうだったとしても

★(6)　――線③「幻滅というものを味わった」とあるが、筆者をそのような気持ちにさせた現実とは、どのようなことだったか。文章中の言葉を用いて、二十五字以上三十字以内で書きなさい。

25

30

★(7)　この文章に込められた筆者の気持ちとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。　［　　］

ア　どんなに憧れていても、欲しい物が手に入らなかった子供の頃の自分を、いとおしむ気持ち。

イ　想像力のすべてを注ぎ、味の幻覚を見たほどの子供の頃の憧れを思い出し、なつかしむ気持ち。

ウ　人生で初めての自由に使えるお金で、長い間憧れていたものを買って食べたときの喜びに震える気持ち。

エ　長い間の憧れが裏切られた悔しさを思い出し、もう二度と美しい外見にはだまされないぞと決意する気持ち。

## 練習問題

**◆次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。**

私には二十歳の成人式という日はなかった。だが、私にとって、「心の成人式」だったあの日が、いつも大切に生き続けている。【それは、①私が十四歳のころのことだった。その日、私は何かほめてもらうようなことをしたのだろうか、父が夕食後「ほうびをあげるからついておいで」といった。経済学者であった父は、当時自分が勤めている大学の図書館長も兼任していた。父は家から数分のところにある大学に私を連れて行った。

大正時代の建物が夜の暗闇の中にどっしりと息づいている構内を少し歩くと、図書館の前に出た。ポケットから鍵を出しながら父は「②ほうびに本を貸してあげるよ」といった。

戦争が終わってまだ三年しかたっていなかったあのころ、すべてが乏しかった。子どもの本などはほとんどない時代だった。図書館もほとんどなかった。私の町にはたった一つ、カードで本を探す閉架式の図書館があったが、子どもが近づくことなど考えることもできない存在だった。】

とうてい近寄ることのできない存在だと思っていた図書館の扉が、今、私の目の前で私のために開く。緊張感でのぼせたようになっている私を、父は閲覧室の奥に連れていき、さらにもう一つの扉を開いた。扉の向こうにはぽっかりと闇があって、階段が地下の方へ降りていった。地下の冷え冷えとした空気と本の古いにおいが暗い穴から立ち上り、私を包んだ。父がスイッチを入れると黄色い電灯がともった。

その光の中から浮かび上がったぎっしり並んだ本棚。そして、本・本・本……。父が、「自分の読みたい本を探しておいで」といった。私は夢見るように本の中を歩き始めた。古びていかめしい学術書ばかりが並んでいたが、宝の森を歩いているように私はうれしかった。

文学書が並んでいる本棚の前に出た。一冊の本が目にとまった。ボードレール『悪の華』……私は自分が未知の世界のふちに立ったようなくるめきを感じた。ひきつけられた。私はその詩集を抱きかかえ、階段のところで待っていてくれた父のところに行った。③父は表紙を眺め、私の顔を見て、とてもまじめにうなずいた。おそらくそのとき、父の中ではこの本についての父としての感情が動いたと思う。だが父は、私を一人の人間として、私の選択をとても大切に受け取ってくれたのであった。

カウンターで父は、自分のカードを使ってこの詩集の貸し出し手続きをしてくれた。私はあのとき、自分が選んだ『悪の華』を実際に読んだかどうかすら覚えていない。くっきりと私の心の中にあるのは、あの日カードを書いた後、私に本を渡してくれた父の表情なのだ。あのとき父は、私をまぶしげに見ていた。それが、一人の人間として私が成長していくであろうことへの父の祝福であったことに、今、私は気がつく。

あの夜から数年後、四十九歳になったばかりの父はこの世を去った。私は二十歳になっていなかった。だが父は、④私に成人式をしていてくれたのだ。あの夜、「心の成人式」を。

それから年月がたった。その間に日本中の人々に、図書館の扉は大きく開かれた。今日も子どもたちが本を借りる手続きをして



いる。それをしずかに眺めている親。小さな「心の成人式」が毎日図書館の中で行われている。

（まついのりこ「あの日の空の青を」より）

(1) ——線①「私が十四歳のころ」について、

★① その当時の社会状況はどのようなものであったのか。なぜそのような状況であったのかがわかるように、文章中の言葉を用いて二十五字程度で書きなさい。

★② 「私が十四歳のころ」を回想して現在の筆者の見解を述べている部分を、【　】内から三十字以内で探し、初めと終わりの五字を書き抜きなさい。（句読点も字数に含める。）

★(2) ——線②「ほうびに本を貸してあげるよ」とあるが、この時までの「私」にとって、図書館の「本」はどのような存在であったのか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。〔　〕

ア　お金には換えられない存在。
イ　豊かさの目安になる存在。
ウ　子供の手には届かない存在。
エ　心を慰めてくれる存在。

★(3) ——線③「父は表紙を眺め、私の顔を見て、とてもまじめにうなずいた」とあるが、「今」の「私」が考える、当時の「父」の気持ちを説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。〔　〕

ア　「私」の選択を意外に感じつつも、選んだ「私」を認める気持ち。
イ　「私」の選択に思わず驚嘆して、選んだ「私」を称賛する気持ち。
ウ　「私」の選択を残念に思って、選んだ「私」をたしなめる気持ち。
エ　「私」の選択に違和感を抱きつつも、選んだ「私」を許す気持ち。

★(4) ——線④「父は、私に成人式をしていてくれたのだ」とあるが、この表現には筆者のどのような思いが込められているか。次の文の［　］に㋐・㋑に当てはまる言葉を、㋐は文章中の言葉を用いて二十字程度で、㋑は二字で考えて書きなさい。

まだ十四歳の私の思いがけない選択を大切に受け止めることで、［㋐］してくれた父への［㋑］の気持ち。

㋐

㋑

# 総合編 1 論理的文章(1)

**1** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。〈静岡改〉

サクラの葉っぱがまだ緑色をしている初秋に、ある質問を受けました。「数日間、雨が降り続いたあとの雨あがりの日、サクラ並木を自転車で走っていました。すると、桜餅の香りがほのかに漂ってきたように思います。雨に濡れたサクラの葉っぱからは、桜餅の香りが漂うのでしょうか。」というものでした。

桜餅の葉っぱからは、おいしそうな甘い香りが漂い、食欲をそそります。これは「クマリン」という物質の香りです。でも、サクラの木に茂っている緑の葉っぱをもぎ取って香りを嗅いでも、①桜餅の葉っぱの香りはしません。

サクラは、葉っぱが虫にかじられて傷つけられたときに、あの香りを発散させて、自分の葉っぱを守るのです。あの香りは、私たちにはおいしそうな気持ちのいい香りなのですが、虫には嫌がらせの香りなのです。そのため、葉っぱをもみくちゃに丸めて傷だらけの状態にすると、虫にかじられたのと同じ状態になり、数分後にあの香りがほのかに漂ってきます。

傷がついていない緑の葉っぱには、クマリンができる前の物質が含まれています。この物質には、まだ香りはありません。葉っぱには、もう一つの物質が含まれています。それは、クマリンができる前の物質をクマリンに変えるはたらきがある物質です。

しかし、傷がつかずに生きている緑の葉っぱの中では、二つの物質は接触しないようになっています。［　　］、クマリンができることはなく、香りは発生しないのです。ところが、葉っぱが傷ついたり、葉っぱが死んだりすると、これらの二つの物質が出会って反応します。その結果、クマリンができて、香りが漂ってくるのです。

ですから、サクラの緑の葉っぱに数日間雨が当たっても、桜餅の香り、すなわち、クマリンの香りが漂うことはありません。では、質問のように、なぜ雨あがりのサクラ並木で、桜餅の香りがしたのでしょうか。

原因は、桜並木のサクラの木の根もと付近にたまっている、サクラの古い落ち葉です。古い落ち葉は死んでしまっているので、桜餅の香りがほのかにします。お天気が続いていると、落ち葉はカラカラに乾いて水気を含んでいません。そのため、香りはほとんどしません。数日間雨が降ると、たっぷりと水を吸った落ち葉から、桜餅の香りがかすかに漂ってきます。

これは、容易に確かめることができます。雨あがりの日、サクラの木の根もと付近にある、水気をたっぷりと含んだサクラの古い落ち葉を一枚、そっと拾い上げて、香りを嗅いでください。桜餅の香りがほのかに漂ってきます。

多くの植物の葉っぱは、秋に枯れ落ちます。そんな光景を見ると、さびしい気持ちになり、葉っぱの命のはかなさを感じます。しかし、葉っぱはもの悲しくさびしい気持ちで生涯を終えるのではありません。



親株のまわりに落ち、枯れ葉や落ち葉になっても、虫に食べられて糞になって土を肥やしたり、微生物に分解されて土に帰り、「腐葉土」の素材となります。腐葉土とは、文字通り、落ち葉が腐って肥やしとなる土です。落ち葉は、土に帰り、若葉が育つ糧になるのです。

サクラの枯れ葉や落ち葉は、②それだけではないのです。親株の根もと付近に落ち、虫の嫌がる香りを放ち、親を守っているようです。腐葉土になるギリギリまで、香りを放っているのです。葉っぱの生き方の〝すごさ〟を感じずにはいられません。

（田中修「植物はすごい」より）

(1) ——線①「桜餅の葉っぱの香り」とあるが、この香りについて説明した次の文の［　　］に当てはまる言葉を、あは文章中の言葉を用いて十字以内で書き、いは四字、うは九字で文章中から書き抜きなさい。

サクラの葉っぱが［あ］したときに葉っぱに含まれている二つの物質が反応して発生する、［い］という物質の香りであり、サクラが虫から［う］ために発散させている。

あ
い
う

(2) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア だから　イ なぜなら
ウ そのうえ　エ または

(3) ——線②「それだけではないのです」とは、どういうことか。次の文の［　　］あ・いに当てはまる言葉を、あは九字、いは十八字で文章中から書き抜きなさい。

サクラの枯れ葉や落ち葉は、肥やしとなって［あ］だけではなく、［い］かのようであるということ。

あ
い

(4) この文章の表現の特徴を説明したものとして最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア 述べたいこととは反対の事柄を、疑問の形で述べたところがある。
イ 人間以外のものを、人間のように見立てて表現したところがある。
ウ 全文を通じて、主語と述語、修飾語と被修飾語の倒置が多く見られる。
エ 一貫して主観的な表現を交えることなく、事実を客観的に述べている。

## 2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈大阪改〉

他者と向き合うというのは、心を開き合うこと、単なる世間話をするようなかかわりではなく、自己をさらけ出してつきあうことをさす。①そこでは、自分の考えていること、感じていることが率直に語られ、お互いの思いが共有される。しかし、人と人はあくまでも他人どうしだ。ものの見方が違うし、感受性が違う。同じ出来事に対しても、それぞれの受け止め方に多少なりともズレがあるのがふつうだ。自己への気づきを得るためには、そうしたズレを実感することが必要なのだ。

それには、お互いの生きている文脈のズレがクローズアップされるような深いかかわりをもつことが前提となる。つきあい始めの頃は、お互いに遠慮がちなところがある。相手の様子をうかがいつつ、できるかぎり相手のものの見方・考え方を尊重しようとする。自分を抑えて、相手に合わせようとする。自分の文脈、つまり自分のものの見方・考え方を相手に強引にぶつけることがないため、相手のものの見方・考え方と真っ向から衝突するようなことはない。A、つきあいが進んで親密な間柄になると、お互いに②自分の文脈を相手に遠慮なくぶつけるようになるため、相手の思いがけない反応に呆れたり腹を立てたり、ちょっとしたことで口論になるなど、相手のもつ文脈との間のズレが鮮明化してくる。

心理的距離が縮まると、ちょっとしたズレも気になってくる。心理的距離が遠かった頃にはまったく気にならなかったズレがクローズアップされ、なんとかその溝を埋めようという試みが始まる。そうしたことの背後には、B。

こうして、親しい間柄では、なぜそんな考え方をするのだろう、どうしてわかってくれないんだろう、との思いが強く働き、わかりあいに向けての交渉が行われる。最初の頃はおおらかにかまえていてくれたのに、親しくなるにしたがって口うるさくなったとか、議論を仕掛けてくるようになったとかこぼす人がいるが、深くかかわるとどうしてもそういった感じになりがちである。

それぞれの価値観や感受性がぶつかり合うような深いかかわりの中では、自分の思いを相手にわかってもらえるように語るということがしつこく行われる。相手が「何を言っているのかわからない」「どうも納得がいかない」などと言いたげな反応を示したら、言葉を換え、また論理や筋立てを変えて語り直すことになる。

人との語り合いの場で、僕たちは相手にすぐに通じないからといって簡単にあきらめたりはしない。自分のものの見方・感じ方と他人のそれとの間に大きな溝があるということは、いろいろなかかわりの中で、十分に体験済みである。C、相手になかなか通じないときには、何とかわかってもらおうと語り直すことになる。相手のものの見方・感じ方の見当をつけ、相手の視点に立って受け入れやすい論理や筋立てを考え直しつつ、語っていく。

そうしたやりとりを繰り返すうちに、相手の視点が知らず知らずのうちに自分の中に取り入れられていく。相手にわかってもらえるように自己の体験を語り直すということは、相手の視点に立って自己の体験を見つめ直すこと、つまりこれまでとは違った視点で自己の体験を見直し、語り直すことを意味する。そこに自己についての新たな発見があるのだ。

（榎本博明「〈ほんとうの自分〉のつくり方」より）



(1) ——線①「そこ」とはどこを指しているか。文章中の言葉を用いて二十字以内で書きなさい。

(2) □A・Cに当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

A〔　　〕C〔　　〕

ア たとえば
イ つまり
ウ そのうえ
エ だが
オ そこで

(3) ——線②「自分の文脈を相手に遠慮なくぶつける」とはどういうことか。次の文の□に当てはまる言葉を文章中から十二字で書き抜きなさい。

相手に合わせるのではなく、

□

を率直に示すこと。

(4) □Bに当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

〔　　〕

ア 結局わかってもらえないというあきらめがあるのだ
イ わかりあいたいという強い欲求が働いているのだ
ウ 相手の考えがわからないという不満が潜んでいるのだ
エ 必ずわかってもらえるという強い自信が存在するのだ

(5) ——線部「自己への気づきを得るためには、そうしたズレを実感することが必要なのだ」とあるが、なぜ「ズレ」を実感することが自己への気づきにつながるのか。その説明として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。

〔　　〕

ア 価値観や感受性の異なる他者にわかってもらえるように、相手の視点に立って語り直すことで、以前とは違う視点から自己の体験を見直すことができるようになるから。
イ 他人と自分とのものの見方や感じ方の違いを意識することで、自分の考えを抑えて相手に合わせていくという、新しい生き方があることがわかるようになるから。
ウ 価値観や感受性が大きく異なる相手と、互いの思いが理解できるまでしつこく語り合うことを通して、自分が間違っていたことに気づくことができるから。
エ 他者の反応に腹を立てたり口論したりしたことを反省することで、他者が自分とはものの見方や感じ方が異なることに気づき、自分の意識が変化していくから。

# 総合編 5 文学的文章(1)

**1** 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

その欠片を手に取った僕は、それが何なのかすぐわかった。

①「へその緒じゃないじゃない。これって卵の殻でしょう?」

「そうよ」

すっかりへその緒が入っているものと思い込んでいた僕は、あまりの中身の違いに②パニックになってしまった。

「どういうこと? なんで卵の殻が入っているの?」

「母さん、育生は卵で産んだの。だから、へその緒じゃなくて、卵の殻を置いているの」

母さんは［　　］とした顔でそう言った。

「そんなわけないじゃない。人間は卵では生まれないんだよ」

そうだ。哺乳類はお母さんのおなかから生まれてくるのだ。僕はまだ九歳だけど、それくらいのことはちゃんと知っている。

「育生。世は二十一世紀よ。人間が月へ飛んでいくのよ。ロボットが工場で働くのよ。コンピューターでなんでもできるこの世の中。卵で子どもを産むくらいなんでもないわよ」

母さんがまじめな顔で言うから、うそなのか本当なのかまだ九歳の僕はわからなくなった。

「でも……、でも、へその緒が親子の証しだって。先生が言ってた」

「教師の言うことを鵜呑みにしていては、賢くなれないぞ。へその緒なんてちょっと大きいスーパーに行けば、百円前後で売ってるわよ。あんなゴムチューブが証しだなんてそれこそびっくりだわ。よく見てよ。へその緒よりずっといかしてるでしょ?」

母さんは僕の手ごと箱を摑むと少し傾けて、僕にもう一度中身を見せた。確かに学校で見たゴムのようなへその緒より、箱の中に入った卵の殻のほうがきれいだけれども。

「じゃあ、卵の殻が僕の家の親子の証しなの?」

僕が言うと、母さんは笑った。

「まさか」

「じゃあ、③証しはどこ?」

「本当バカね。証しって物質じゃないから目に見えないのよ」

僕はへその緒も無いうえに母さんにバカだと笑われてショックで泣きそうになった。

「結局僕が捨て子だからでしょ?」

僕がヒステリックに言うと母さんはやれやれという顔をした。

「仕方ないわねえ。今日は特別育生に④本当の親子の証しを見せてやるとするか。すごく体力が消耗するからあんまりやりたくないんだけどなあ」

母さんはそう言いながら僕の前にしゃがみこんだ。そして、腕まくりをして、僕を思いっきり抱きしめた。母さんが力任せに僕を抱きしめたから、僕は一瞬息ができなくなってしまった。

「ね。今見えたでしょう。証し」



母さんは僕を解放すると、嬉しそうに訊いた。

「見えないよ。痛かっただけだ」

僕は本当のことを答えた。

「見えないって? 修行がまだまだ足りないねえ。こういうことが見えなくてはだめよ、育生。育生ももう少し大きくなったら、ちゃんと見えるようになるわ。証しとかがさ」

(瀬尾まいこ「卵の緒」より)

(1) ——線①「へその緒」とあるが、母さんが「へその緒」を別のものにたとえている部分を文章中から書き抜きなさい。

［　　］

(2) ——線②「パニックになってしまった」とあるが、それはなぜか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を文章中から書き抜きなさい。

［　　］だと思っていた中身が、［　　］だったから。

(3) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　しんみり　イ　けろり
ウ　晴れ晴れ　エ　憮然

(4) ——線③「証しはどこ?」とあるが、「僕」が親子の証しを見たがっているのは、何を確かめたかったからか。簡潔に書きなさい。

［　　］

(5) ——線④「本当の親子の証しを見せてやるとするか」について、次の各問いに答えなさい。

① 「本当の親子の証し」として、母さんはどのような行動をとったか。文章中から十二字で書き抜きなさい。

［　　］

② ①の行動によって、母さんはどのようなことを示したかったのか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア 「僕」が捨て子であると疑っていることに、母さんが怒りを感じていること。
イ 自分が捨て子だと「僕」に思わせてしまったことを、申し訳なく思っているということ。
ウ 母さんと「僕」は、離れようとしても離れられないのだということ。
エ 母さんが「僕」のことをとても大切に思い、愛しているということ。

## 2 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。 〈兵庫〉

小学校二年生の少女（みーちゃん）が、学校を休んだ友達のお見舞いに行く途中に椿の花の咲く家の前で立ち止まっていた時、その家の主である絹子に声をかけられた場面である。

「何してるの？」

「花、見てたの。赤くて、きれい」

「そう」

①絹子は目を細めた。目の前に、椿の木がポツポツと花をつけている。少女はリュックサックを背負っていた。ランドセルのように形がしっかり取られた、四角いリュックサックだった。少女の身体と同じくらいの厚みの、彼女の身体には些か大きなものだった。それを背負い直しながら少女が吐く息が、真っ白かった。

「おばちゃん、ここの家の人？」

「そうよ。きれいだって言ってもらえると嬉しいわ」

「うん。すごくかわいい」

言ってから、少女はどうしてかちょっと俯いた。②躊躇うような沈黙が続いてから、真っ赤な頬っぺたをこする。意を決したように、絹子の顔を覗き込んだ。

「あのね」

③「うん」

「ここに一つ、花が落ちてるの」

少女は自分の足元の少し先を指差した。絹子は小さな人差し指の示す方を目で辿る。見れば、なるほど椿の花が一つ落ちていた。絹子の目がそれを捉えたのを待って、少女は慌てたように早口で言った。

「落ちてたの。最初から落ちてたの。みーちゃんが落としたんじゃないの。最初から落ちてたの。本当にそうなの」

言い終えた後で、彼女は信じてもらえるだろうかというように不安げに絹子を見上げる。大きな目が瞬き一つせず、じっと絹子を見ていた。④**ああ、そういうことか**。女の子の視線を受け止めながら、絹子はくすりと笑った。絹子が笑ったことで緊張が解けたのか、『みーちゃん』の頬がほっと緩んだ。椿の花は、花びらを散らさない。彼女はそれを誰かがもぎ取ったせいだと思ったのだろう。確かに、まだ花が落ちる時期には随分早いし、落ちている花は一つきりだ。

しかし、やはり例外の花はある。絹子は微笑んだ。

「わかってる。この花はね。『椿』って言って、枯れる時には花ごと落ちるの。普通の花はチラチラ花びらが落ちてくんだけど、そうじゃないのね。だから誰もアナタが取ったなんて思わないわよ」

「本当に？」

「ええ。落ちた花を見てたの？」

「うん」

少女は返事をして、また黙った。絹子の顔と落ちた椿を見比べるように順番に目で追ってから、［　　］と絹子の方に視線を戻した。

「あの花、もらっちゃ駄目？」

「落ちた、あれのこと？」

「そう」





⑤絹子は落ちていた椿の花をそっと拾い上げる。枯れ始めた様子もなく、花びらもきちんとついている。しかし手のひらに載せてよく見ると、花びらの一つが石にでも当たったのか色が滲んで濃くひしゃげているところがあった。少女の目が絹子の手のひらの上をじっと見つめていた。絹子は笑みを浮かべながら、花の載った手を彼女の顔の前に近づける。

「別にいいけど、新しい花をあげようか？　ここ、花の先のところが潰れて汚れてるでしょう？」

汚れの箇所を示してみるが、少女は慌てたように首を振った。振り動かした後で、顔をぱっと上げる。嬉しそうに目を輝かせていた。

「くれるの？」

「いいわよ。持って帰って。でも本当にそれでいいの？」

⑥「うん」

少女は本当に嬉しそうだった。

（辻村深月「雪の降る道」より）

(1) ——線①「絹子は目を細めた」とあるが、このときの絹子の気持ちが表れている言葉を文章中から一文で探し、初めの五字を書き抜きなさい。

| | | | | |
|---|---|---|---|---|
| | | | | |

(2) ——線②「躊躇うような沈黙」とあるが、これは少女のどのような様子を表したものか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　正義感　　イ　不信感　　ウ　緊張感　　エ　充実感

(3) ——線③・⑥の「うん」を朗読するときの読み方として最も適切なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

③［　　］　⑥［　　］

ア　苦しそうなか細い声で
イ　晴れやかな明るい声で
ウ　不服そうな抑えた声で
エ　つぶやくような沈んだ声で
オ　怒ったような力強い声で
カ　見守るような優しい声で

(4) ——線④「ああ、そういうことか」とは、どういうことか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を十字以内で書きなさい。

絹子は、少女が「自分が［　　］と思われているのではないか」と不安を感じていることに気づいた。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | |

(5) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　すごすご　　イ　おずおず
ウ　きょろきょろ　　エ　じろじろ

(6) ——線⑤「絹子は落ちていた椿の花をそっと拾い上げる」とあるが、これは少女のどのような様子を表したものか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　正義感　　イ　不信感　　ウ　緊張感　　エ　充実感

(3) ——線③・⑥の「うん」を朗読するときの読み方として最も適切なものを次から一つずつ選び、記号で答えなさい。

③［　　］　⑥［　　］

ア　苦しそうなか細い声で
イ　晴れやかな明るい声で
ウ　不服そうな抑えた声で
エ　つぶやくような沈んだ声で
オ　怒ったような力強い声で
カ　見守るような優しい声で

(4) ——線④「ああ、そういうことか」とは、どういうことか。次の文の［　　］に当てはまる言葉を十字以内で書きなさい。

絹子は、少女が「自分が［　　］と思われているのではないか」と不安を感じていることに気づいた。

| | | | | | | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | | | | | | | | | |

(5) ［　　］に当てはまる言葉として最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　すごすご　　イ　おずおず
ウ　きょろきょろ　　エ　じろじろ

(6) ——線⑤「絹子は落ちていた椿の花をそっと拾い上げる」とあるが、これは少女のどのような様子を表したものか。最も適切なものを次から一つ選び、記号で答えなさい。［　　］

ア　正義感　　イ　不信感　　ウ　緊張感　　エ　充実感

# 10 随筆の主題を捉える　問題集▼58〜63ページ

例題（58〜59ページ）

◆(1) (あ) 東京　(い) 父
(2) 兄の家で上
(3) エ
(4) (あ) 恥ずかしく　(い) 東京見物

●解説●

(1) 文章中に繰り返し出てくる「父」「東京」といった言葉に着目し、文章全体の大体の内容を捉える。
(2) 他の文との文末表現の違いを捉える。
(4) 父が見送りに呼び出さなかったこと、「風呂小屋」よりも「東京見物」を選んで会いに来てくれたこと、これらの二つの出来事を押さえ、父の愛情と筆者の父に対する思いが主題になっていることを捉える。

確認問題（60〜61ページ）

◆(1) メロンパン
(2) それから一
(3) 夢中にさせ、なやませた
(4) 例 見た目だけでそのおいしさを信じて疑わない（20字）
(5) ア
(6) 例 メロンパンの中身が、味も素っ気もないただのパンだったこと。（29字）
(7) イ

●解説●

(1) ① 11〜12行目「戦争が終わって……すべてが乏しかった」の部分を、「……状況。」という形にまとめる。
② 筆者の感想や意見が書かれている部分は、文末表現が「〜だろう（か）」「〜と思う」などとなっていることが多い。
(3) 二文後の「だが父は、……私の選択をとても大切に受け取ってくれたのであった」から、父が自分を認めてくれたのだと筆者が感じていたことが読み取れる。
(4) 「成人式をしていてくれた」という表現に着目しながら、父からの「祝福」を感じた「私」の気持ちを考える。この文章の主題は、十四歳の自分を認めてくれた父への「感謝」である。

練習問題（62〜63ページ）

◆(1) ① 例 戦後三年しかたっていないので、すべてが乏しい状況。（25字）
② その日、私 〜 のだろうか（27字）
(2) ウ　(3) ア
(4) あ 例 私が一人の人間として成長していくことを祝福（21字）
い 例 感謝

●解説●

(2) 前半は食べたことがないメロンパンに対する憧れ、後半はメロンパンを初めて食べたときのことが書かれている。
(6) 「幻滅」は美化して空想していたことと現実が違ってがっかりすること。メロンパンの中身の「現実」を答える。
(7) 「記憶もないのに……メロンパンだけだった」（23〜25行目）とあるように、筆者はメロンパンに憧れた子供時代をなつかしんでいる。



# 11 詩の表現技法を理解する　問題集▼64〜69ページ

例題（65ページ）

◆(1) A エ　B ア
(2) ① オ　③ ウ
(3) み空〔御空〕・わが世（順不同）
(4) ④ ア　⑥ エ
(5) 移しかえる

●解説●

(1) Aは「そだちし」「妹」などの文語表現を用い、七五調のリズムで書かれている。Bは現代の言葉を用い、自由なリズムで書かれている。
(2) ① 「み空の花を星といひ」と「わが世の星を花といふ」の構成が対になっている。
③ 「白露のひとしづくを見よ」となるところを語順を入れ替えて表現している。
(3) 「かれとこれとに隔たれど」は、「あちらとこちらに分かれてしまったが」という意味。星と花の居場所を指している。
(4) ——線④は「ように」を用いてたとえている。——線⑥は同じ言葉を繰り返している。
(5) 「子どもよ／おまえのその肩に／おとなたちは／きょうからあしたを移しかえる」に着目。

確認問題（66ページ）

1
(1) 三
(2) エ
(3) 3
(4) イ・ウ（順不同）
(5) やがて
(6) 蝶〔小蝶〕・蜘蛛〔小蜘蛛〕（順不同）

●解説●

(2) 「すべぞなき」「いかにせむ」などの文語表現と七五調のリズムに着目。
(3) 「小蜘蛛は花を守り顔」と次の行の「小蝶は花に酔ひ顔」が対句的表現になっている。
(4) 「いかにせむ」は花の思いを述べた言葉。花の気持ちが述べられているという点で、擬人法が用いられているといえる。また、5・6行目と7・8行目が同じ構成で対句になっている。
(5) 第一連・第二連では蝶と蜘蛛と花の置かれた状況が述べられ、第三連では時が移り、花が散ってからの蝶と蜘蛛の様子が述べられている。
(6) 一つの花をめぐってライバル関係にある蝶と蜘蛛が「強敵」である。

確認問題（67ページ）

2
(1) 口（語）自由（詩）
(2) 1・11（順不同）
(3) カリリッ
(4) イ
(5) あ 砂の音　い 海の底

●解説●

(1) 現代の言葉を用い、自由なリズムで書かれている。
(2) 名詞（体言）で終わっている行を探す。
(3) 擬声語は、擬音語ともいい、動物の声やものの音をそれらし

# 1 論理的文章(1)

問題集▼130〜133ページ

**1** (130〜131ページ)

(1) あ 例 傷ついたり死んだり（9字）
　　い クマリン　う 自分の葉っぱを守る
(2) ア
(3) あ 若葉が育つ糧になる
　　い 虫の嫌がる香りを放ち、親を守っている
(4) イ

●解説●

(1) 第二〜五段落から、桜餅の葉っぱの香りは「クマリン」の香りであり、サクラが自分の葉っぱを守るために発散させていること、葉っぱが傷ついたり死んだりするとサクラの葉に含まれる二つの物質が反応してクマリンができることを捉える。

(2) 傷がついていない葉っぱの中では、クマリンができる前の物質とその物質をクマリンに変えるはたらきがある物質が接触しないので、クマリンはできない、という文脈になるので順接。

(3) ――線②の前後で、枯れ葉や落ち葉になったサクラの葉がどのような役割を果たしているのかを、比喩的表現を用いてまとめてある箇所に着目して捉える。

(4) 「葉っぱはもの悲しくさびしい気持ちで生涯を終えるのではありません」（42〜43行目）などは、人間ではないサクラの葉っぱを人間のように表現しているのでイが正解。アのような表現や、ウ「倒置」は文章中にない。「さびしい気持ちになり、……感じます」（41行目）、「葉っぱの生き方の〝すごさ〟を感じずにはいられません」（51〜52行目）など主観的な表現が用いられているのでエも適切ではない。

**2** (132〜133ページ)

(1) (1) 例 自己をさらけ出して他者とつきあう場。（18字）
(2) A エ　C オ
(3) 自分のものの見方・考え方〔自分のものの見方・感じ方〕
(4) イ
(5) ア

●解説●

(1) 「そこ」は、直前の「他者と向き合うというのは、……自己をさらけ出してつきあうこと」の部分を受けている。

(2) □A の前後でつきあい始めの頃とつきあいが進んだ後との違いが説明されているので□A には逆接の接続語が入る。□C の後は、直前の「自分のものの見方・感じ方と……体験済みである」を受けて導ける内容になっているので順接。

(3) 「自分の文脈」とは、前の段落に「自分の文脈、つまり……」とあるように、「自分のものの見方・考え方」のこと。これを「相手に遠慮なくぶつける」とは、相手に合わせるのではなく、自分の考え方を、相手に気兼ねせず率直に示すことである。

(4) 親密な間柄でクローズアップされた相手との間のズレを埋めようとするのは、どのような気持ちからかを考える。25行目「どうしてわかってくれないんだろう」、31行目「自分の思いを相手にわかってもらえるように」、39行目「何とかわかってもらおう」などから、相手にわかってもらいたいという強い気持ちからであることをつかむ。

(5) ここまでの設問と最終段落から考える。ものの見方や感じ方の違う相手に、何とかわかってもらおうとしてやりとりを繰り返すうちに、新たな視点で自己の経験を捉えるようになり、それを通して新たな自己に気づくことを説明したアが正解。



# 2 論理的文章(2)

問題集▼134〜137ページ

**1** (134〜135ページ)

(1) あ 例 眠そうな顔でつまらなそうに聞いていた（18字）
　　い 例 目を生き生きとさせ、熱心に話に聞き入った（20字）
(2) ウ
(3) 何も新しいことにチャレンジしない
(4) ア
(5) イ

●解説●

(1) 「この」が指している「このときは……熱心に話に聞き入るということ」（5〜10行目）の部分をまとめる。

(2) □A は、観察したことを「失敗学」という学問としてまとめあげた、ということから考える。□B は、直後の「発明」は失敗を「新たな創造の種にすることでなし得たもの」なので、「新しい時代を作り出すような」という意の「画期的」が入る。□C は「仕事」「家事」「趣味」に共通する性質を考える。

(3) 「その人」と前行の「そうした人」は同じ人を指す。

(4) 3・4段落では、失敗を負のイメージで捉え、避けた場合について述べている。一方、5段落では、失敗が人間や社会にもたらすプラス面について述べている。正解はア。

(5) 5段落にあるように、筆者は、過去の失敗について学び、考えを深めることで人類や社会は進歩してきたのであり、失敗なしには人間は成長できないと考えている。ア・ウは、筆者の考えとは正反対。エは「あれこれ考えずに何度でも失敗するのがよい」が6段落の内容に反する。

**2** (136〜137ページ)

(1) A 例 動物たちがためこんでいるえさ。
　　B 例 植物がタネにためている栄養。
(2) えさを貯える
(3) ウ
(4) イ
(5) あ 例 ごちそうとして魅力のある大きさのドングリ（20字）
　　い 多く子孫を残せる（8字）

●解説●

(1) 〜〜線Aは次行の「冬に備えてえさをためこむ」、〜〜線Bは27〜28行目「豊富な貯えをもつタネ」、33行目「ドングリに貯えられている栄養」、49行目「多くの栄養をためているドングリ」に着目して、それぞれ簡潔にまとめる。

(2) 「忘れっぽい」とは、直前の文に着目すると、動物たちが隠したえさのことを忘れてしまうこと、覚えていられないことを表しているとわかる。このことを述べている箇所を探す。

(3) 直前の「そこ」が指す第三段落の内容を捉える。リスやネズミが埋めたことを忘れたタネから植物が育ち、実がみのる→子孫がその実をえさにする、という関係である。アは、リスたちは、木を栽培しているわけではない。イは、リスは祖先の食べ残した実そのものを食べるわけではない。エは、みのった実を食べるのは、木の実を埋めたリスの子孫。正解はウ。

(4) 「だから」という接続語に着目。木の実を大きくするなら数を減らさなければならない理由を説明した文の後に入る。

(5) い は、――線③の後で「それだけ多く子孫を残せるからに違いありません」と理由を述べていることに着目。あは最終段落の「その分不相応な……アピールである」「リスやネズミたちが……魅力のある大きさ」を、説明文に合わせてまとめる。

# 5 文学的文章(1)

問題集▼150〜153ページ

**1** (150〜151ページ)

(1) ゴムチューブ　(2) へその緒・卵の殻　(3) イ

(4) 例「僕」と母さんが本当の親子であること。〔自分が捨て子ではないこと。〕

(5) ① 僕を思いっきり抱きしめた　② エ

●解説●

(1) 20〜23行目の母さんの発言の中に、「あんなゴムチューブが」とある。形状が似ていることから、へその緒をゴムチューブにたとえて話しているのである。

(2) 直前に「あまりの中身の違いに」とあるので、中身がどのように違っていたのかを正確に捉える。2行目の「へその緒じゃないじゃない。これって卵の殻でしょう?」という育生の言葉に着目する。

(3) 卵の殻を渡されて混乱している育生に対し、母さんが「育生は卵で産んだ」(7行目)と明らかな冗談を言い放っている場面を思い浮かべると、「何事もなかったかのように、平然と」という意味のイ「けろり」とした顔がふさわしい。

(4) 34行目の「結局僕が捨て子だからでしょ?」という育生の言葉に着目。育生は、自分が捨て子なのではないかという疑問をもっているため、先生から「親子の証し」であると聞かされたへその緒を見たがっているのである。

(5) ① 母さんの言葉の直後にある行動から書き抜く。

**2** (152〜153ページ)

(1) きれいだっ　(2) ウ　(3) ③ カ　⑥ イ

(4) 例 椿の花を落とした(8字)　(5) イ

(6) 少女の目が

●解説●

(1) 「目を細めた」は、笑みがこぼれた様子。絹子の気持ちを「嬉しい」と直接的に表した一文を押さえる。

(2) 次の一文の「意を決したように」という表現に着目する。落ちた椿の花のことを「意を決し」て切り出す前の、少女の緊張した様子を捉える。

(3) それぞれの会話主と、場面を押さえる。——線③は、少女に答える絹子の言葉。——線⑥は、「本当に嬉しそう」な様子の少女の言葉である。

(4) 22〜23行目「落ちてたの。……本当にそうなの」という少女の訴えから、絹子がどのようなことを察したのかを考える。

(5) 「おずおず」は、ためらいがちな様子を表す。直前の「絹子の顔と落ちた椿を見比べるよう」な様子から、少女がためらいがちに絹子の気持ちを推し量っていることを読み取る。

(6) 手のひらの上、つまり手に載せた椿の花をじっと見ている少女の様子を押さえる。



# 6 文学的文章(2)

問題集▼154〜157ページ

**1** (154〜155ページ)

(1) (あ) エ　(い) ア　(2) ウ　(3) ア

(4) 例 キックで骨折することは絶対にありえないということ。(25字)

(5) 意識してない心の底(9字)　(6) イ

●解説●

(1) (あ) 「つばを飲みこ」む行動は、息をこらしてなりゆきを見守る様子を表す。なかなか回復しないことに悩んでいる真紀が、期待を込めて冴子の言葉を待っている様子を読み取る。

(い) 直後の「そうだった」に続く二文から、真紀が冴子の言葉に納得していることを読み取る。

(2) 後に続く冴子の言葉から、親友の加奈も真紀と同様の反応をしたことがわかる。一度経験したことから、冴子には真紀の反応が予想できていたのである。

(3) 冴子の言葉の中で、加奈が自分と同じことを言っていたことと、「意識してない心の底」という思いがけない言葉を耳にして驚き、興味を示している。

(4) 父の言葉が、冴子の話を受けたものであることを捉える。冴子の言葉の中の「頭の中ではわかってるんやもん」に着目して、何がわかっているかを読み取る。

(5) 後に続く「……の不安が、きっちり表に出てくるんやねぇ」から、不安があったところを考える。冴子の言葉に、「加奈ちゃんの不安は……意識してない心の底にあったんよ」とある。

**2** (156〜157ページ)

(1) エ　(2) 例 王羲之のように長い歴史の中で認められ、残ってきた人物を超えるなどと言うのは恐れ多いと考えているから。

(3) 例 いろんな人が挑み続けていくこと。(16字)

(4) ウ　(5) 例 「わたし」は書に挑み続ける勇気がないが、少年は迷いのない様子で最高の作品を目指して挑み続けている。

●解説●

(1) 「わたし」の「書って悲しいですね」(1行目)や「わたしたちはなんのために書いているんでしょう」(5〜6行目)という言葉に、「むなしさ」が表現されている。

(2) 28行目「怖いことを言うね」に続く先生の言葉に、その理由が書かれている。不要な語句を除きながら、要点をまとめる。

(3) ——線③を含む先生の言葉を丁寧に読み取る。「いろんな人が挑み」「それでも僕たちは挑み続ける」といった部分を押さえて「……こと。」という形にまとめる。

(4) ——線④の前の部分は「わたし」の心の内、後の部分は机に向かう少年の描写である。「風が吹き、髪が揺れる」という感覚的な描写が、自分とは対照的な少年の姿に気づいて意識が変化するきっかけとなっている。

(5) 「風が吹き、髪が揺れる」という描写の、前に「わたし」のこと、後に少年のことが書かれている。それぞれを照らし合わせて、「登る勇気など、わたしにはなかった」(45行目)、「そこにあるのは、登る人の姿だった」(51行目)、「彼は高い高い頂を目指していた」(52〜53行目)などの表現から違いをまとめる。